

エルンスト・トレルチにおける

„Kompromiß“の概念

安 酸 敏 真

一、序論

『近代におけるプロテスタント・キリスト教と教会』や『社会教説』のなかに典型的にあらわれているエルンスト・トレルチのキリスト教史解釈は、従来の教会史・教理史の記述からすればきわめて独創的なものであり、それだけにまた多くの論議や批判を惹き起こしたのであるが、それは間違いなくキリスト教思想史に関する第一級の解釈であり、今日でもなお至高の価値を有していると思われる。しかしながら、実際には、そこで展開された彼のキリスト教史理解は同時代ならびに次代の神学者たちによって必ずしも正しく理解されなかった。⁽²⁾

トレルチのキリスト教史理解——それはまた同時にキリスト教理解でもあるのだが——、また総じてトレルチそのものが、全く不当に忘れ去られてしまった背景には、神学的潮流の偉大な転回ということが考えられるのであるが、より本質的には、トレルチの採った方法論の特異性と問題性⁽³⁾、またかかる方法論を神学に導入した際に結果するキリスト教の歴史的相対化がト

レルチ自身によって充分神学的に克服されなかったこと、が指摘されなければならないであろう。このことと密接に関連して、彼が用いた概念の不明瞭さがともすれば余人の誤解を招き、彼の本来意図したところがその固有の意味で理解されなかったことがあげられる。宗教哲学の領域における(宗教的ア priori) (das religiöse Apriori) の概念がそうであったように、広狭両義のキリスト教史を扱った著作に頻出する Kompromiß の概念もきわめて問題的な概念である。しかしトレルチにとってこの Kompromiß という概念がいかに重要な意義を有するものであるかは、英国での講演のためにのされた草稿——これが結局彼の遺稿となるのだが——の末尾にあらわれるトレルチ自身の表白にも明らかである。

「このようにわたしとしては、故国〔ドイツ〕におけるよりもここ〔イギリス〕においてのほうが、 compromise [Kompromiß] の原理にわたしが執着していることを告白し易いのである。わたしはそれ以外の原理については知らないし、またそれ以外の原理について知っているような実践的思想家も知らない⁽⁴⁾。」

それではトレルチが終生執着し続けたこの Kompromiß の原理とは一体いかなるものであろうか。この概念は彼の処女作にすでに現われているが、とりわけこの概念が決定的に重要な役割を果たすのは、彼の magna opus たる『社会教説』に

おいてである。それゆえ彼のこの概念を徹底的に分析し、そこからこの概念のトレルチ固有の意味を剔抉することは、彼のキリスト教理解、キリスト教史理解を知る上できわめて意義深いことと思われる。

本稿は筆者のかかる関心からなされた Kompromiss 概念の研究である。

二、用例分析

まず研究の第一手順として、筆者が参照しえた限りでのトレルチの著作に現われる Kompromiss の概念を、出典別に整理すれば末尾の一覽表のようになる。

これによって一目瞭然なことは、たとえば〈宗教的アブリオリ〉の概念などとは違い、Kompromiss の概念はトレルチのほとんどすべての著作に散見する。従ってまた彼の著作活動の全時期にわたる、概念だということである。それゆえそれはかなり幅広い概念であることが予想される。そこでトレルチの著作に散見するこれらの用例を、便宜上いくつかのグループに分類してみれば以下のようなになる。

- (一) キリスト教と「世」との Kompromiss⁽¹⁾
 - A 「世」との
 - A' 「世」に属する事項との
 - B 罪ないし罪に属する事項との
 - C 現実生活ないし現実的事項との

研究ノート

- D 国家ないし国家的事項との
- E 文化との
- (二) 自然と超自然との Kompromiss⁽²⁾
 - A 自然と超自然との
 - B 理性と啓示との
 - C 古代とキリスト教との
 - D 世俗的道德とキリスト教倫理との
 - E 「古代的」学問とキリスト教との
- (三) キリスト教と近代世界との Kompromiss⁽³⁾
 - A キリスト教と近代世界との
 - B 啓蒙主義と神学との
 - C 思弁と神学との
 - D キリスト教と「近代的」学問との
 - E 伝承ないし伝統との
- (四) 教会類型と分派類型とに特に関連して⁽⁴⁾
 - A (教会は Kompromiss の立場である)
 - A' 「教会的な Kompromiss」(„der kirchliche Kompromiss“)
 - B (分派は Kompromisslosigkeit の立場である)
- (五) 自然法に関連して⁽⁵⁾
 - A 絶対的自然法と相対的自然法との
 - B キリスト教倫理と自然法との
 - C (絶対的自然法は Kompromiss によって鈍化されてい

- ない神の絶対的律法である)
 D (相対的自然法は自然法と原罪との Kompromiss である)
 E (相対的自然法は Kompromiss の手段である)
 F 相異なるふたつのもの間の Kompromiss
 A 自然と理性との
 B 自然主義と理想主義との
 C 実証的「実定的」なものと理性的なものとの
 D 事実的なものと概念的なものとの
 E 善と悪との
 F 個体目的と社会目的との
 G その他の何かあるものとの Kompromiss
 A 聖書との
 B 律法概念との
 C 非自由との
 D 有機的原理との
 E 正反対の精神との
 F 絶対主義との
 G 社会民主主義との
 H 社会主義との
 I 合成名詞として
 A „Stufen——“ [「段階の——」]

- B „——bestimmung“ [——の規定]
 C „——charakter“ [——の性格]
 D „——ethik“ [——の倫理]
 E „——form“ [——の形式]
 F „——gesinnung“ [——の心情]
 G „——institut“ [——の制度]
 H „——mittel“ [——の手段]
 I „——moral“ [——の道德]
 J „——natur“ [——の性質]
 K „——prinzip“ [——の原理]
 L „——religion“ [——の宗教]
 M „——theologie“ [——の神学]
 N その他、派生語としての用法、一般概念としての用法、などが見られる。
 O 理解を助けるための以上の便宜的分類からも、トルルチにおける Kompromiss 概念の用法はかなり多岐にわたることがわかる。われわれが考察の対象としている三百十余の用例のなかには、取り立てて論ずるほどの深い意味をもたない通一遍の用法もあることは確かであるが、それを除外すれば、そこにはトルルチ特有の何某かの積極的主張があると思われる。しかもわれわれの見るところ、この概念はトルルチのキリスト教理解および彼の思想の核心に深く触れるものであると思われる。それで

はトレルチは一体いかなる意味でこの概念を用い、またかかる概念によっていかなる思想を表わそうとしたのであろうか。

三、Kompromiss 概念のトレルチの意味

ドイツ語の „Kompromiss“ [英語では “compromise”] なる語には、「妥協」という日本語が対応せられるのが通例であるが、われわれはこれまでそうすることを意図的に避けて原語のまま表記してきた。というのは、日本語の「妥協」は積極的の意味を表わすことは稀で、むしろ通常は否定的響きしかもっていないのであるが、トレルチにとつての Kompromiss とは決してそのような否定的なものではないからである。しかし事情はドイツ語の „Kompromiss“ の場合も同様のようで、トレルチは「われわれドイツ人の多くにとつては、Kompromiss といえは、およそ思想家の犯し得るものとも軽蔑すべきこと」もつとも凡俗なることと考えられている。人が要求するのは、⁽¹⁷⁾「これか」(Entweder—Oder)と云うラチ、カリスムである」と述べている。従つて原語のまま表記しても、「妥協」という訳語を用いても、実のところはその語が与える否定的含蓄を払拭できないのであるが、日本語の「妥協」というフィルターを通さずに、まずトレルチにおける Kompromiss の概念をそのものとして考察するために、敢えてわれわれは原語をそのまま用いているわけである。

さてトレルチにおける Kompromiss の概念が否定的響きし

かもないそのような通常の意味での「妥協」ではないとすれば、それは一体いかなる意味なのであろうか。たしかにトレルチも「腐敗した、一切のものを鈍化する。最も悪い意味での実践的 Kompromiss」⁽¹⁸⁾ について言及しているが、それはただの一回であり、しかもそれを否定する仕方においてである。トレルチは Kompromiss と云ふ語の「鈍化」(Abstumpfung) や「弛緩」(Erweichung) と云ふ悪しき一面⁽¹⁹⁾、また Kompromiss が「最も混乱したこのうえなく脆い折衷主義」⁽²⁰⁾ に陥り易いものであることを認めるのに吝ではないが、それにもかかわらず大抵の場合、彼は徹頭徹尾肯定的意味合いでこの語を用いている。「原理矛盾的な Kompromiss」という表現がないではないが、それはむしろ例外的である。一般的には、トレルチのいう Kompromiss は決して「理念矛盾的な譲歩」(eine ideewidrige Konzession) と云つたようなものではなく、むしろ「単なる協定以上のもの」⁽²¹⁾ (mehr als die bloße Abfindung) である。しかしそうかといつてそれは「内的結合」や「内的合一」とまではいかない。そういう意味でならむしろ「外的順応」と言つたほうが Kompromiss の事態により即応しているであらう。ともあれトレルチの Kompromiss 概念はきわめて微妙な概念であり、決して「妥協」という訳語に固定しては採えきれないものである。トレルチのいう Kompromiss が一義に固定できなうものであることは、彼が随時それを併記する関連概念の多様性によつ

ても窺ひ知ることがある。そのような関連概念としてわれわれは、「折衝」(Anseinandersetzung)、「融合」(Verschmelzung)、「媒介」(Vermittlung)、「調停」(Ausgleichung)、「均衡」(Ausgleich)、「提携」(Koalition)、「協力」(Kooperation)、「講和」(Friede)、「綜合」(Synthese)、「結合」(Verbindung)、「順応」(Anpassung)などの概念を挙げるといふことができるであらう。メンデルのこのKompromißは「これらの概念と一面で重なりつつ、しかもこれらのいずれとも単純に置き換へられないものである。それはこれらの概念によつて表わされるそれぞれの事態をひとつのマスケットとして含み有つ動的な概念である。J・L・マダムスは、トレルチの一般の用法によれば、Kompromißは「キリスト教と世との間の緊張 (Tension) と積極的協力 (positive cooperation) との両方ををし示す概念である」(傍点は筆者)と述べているが、正鵠を射た言である。なぜならトレルチのKompromiß概念を動的たうていづるのには、実はこの「緊張」と「積極的協力」の二大構成契機だからである。ここで「緊張」(Spannung) という概念は特に重要である。この側面を見落とせば Kompromiß のトレルチの意味は全く歪められてしまつてあつた。

この両概念の結びつきは以下の引用に明らかである。

「こうした緊張はわれわれの人生大のものであり、無数のやむをえないつねに新たな Kompromiß において解決されるが、

かかる Kompromiß において、反目、対立が絶えず新たに実を結び、またそのついでかつて敵格で急進的な信徒はつねに孤独な警告者として、地の塩として聳立するのである」(傍点は筆者)。

ここには「緊張」→Kompromiß→「緊張」という、「緊張」とKompromißとの間の一種の弁証法的關係が読みとれる。Kompromißとはいはば対外的緊張を解決するために、その緊張の要因を自己の内部に取り込むという仕方であるが、却つてそのことによつて対外的緊張の緩和と逆比例的に、その内部に新たな「緊張」(反目対立)を生み出す。すなわち Kompromißとは、他なる要因を自己の内部に容れることであるから、それによつて「緊張」は却つて尖鋭化され、「緊張」のポテンツは高くなるのである。Kompromißとは「緊張」の無くなつた状態の謂いはなく、むしろ「戦闘」の継続している状態のことである。(40) 『社会教説』が継続しているからこそ Kompromiß なのである。『社会教説』の末尾でいわれる「絶えず前方へと駆り立てる緊張」(die un-aufhörlich vorwärts treibende Spannung)とは、かかる事態を「緊張」の側面から捉えた表現である。

以上を要するに、トレルチのこの Kompromißとは、絶えず、異化の危険性を孕みつつも、そのまま外に放置しておいては自己の停滞と限局しかありえない対外的緊張を、自己の内部に取り入れることによつて、捨て難い高い価値を有する爾余のもの

との並存 (Nebeneinander) と相互浸透 (Uneinander) を可能にし⁽⁴²⁾、その自己の普遍性 (Universalität) を獲得することである⁽⁴³⁾。それゆえ「Kompromiss」はじめて普遍主義 (Universalismus) を「能くするものである」⁽⁴⁴⁾。トレルチにとって、Kompromiss を媒介としたこの普遍化の方向が頹落や敗北的後退を意味するものではなく、「発展」 (Entwicklung) の方向を示すものであることは言うまでもなく⁽⁴⁵⁾。

トレルチが執着する Kompromiss とは、以上のような意味での Kompromiss なのであり、それを彼は「創造的な Kompromiss」 (schöpferischer Kompromiss) と自ら言う方で表わしている。創造的な緊張的協力的協力の緊張こそが、トレルチの Kompromiss 概念の本来の意味である。

四 トレルチのキリスト教理解と Kompromiss の概念

以上の考察によつて、トレルチが好んで用いる Kompromiss という用語には、敗北的後退という否定的イメージしか与えない通常の意味での Kompromiss、すなわち「妥協」とは全く異なった積極的創造的な意味がこめられていることが明らかにしたのであるが、それではなにゆえトレルチはこのような問題的な概念を用いたのであろうか。

それは、キリスト教の歴史全体に「社会的設問」を適用することによつて、キリスト教という宗教領域と爾余の生の領域との間の相互関係・相互作用を問題にしたトレルチにとつて、キ

リスト教とその歴史的状況との間の相克・相補・互惠といった相互作用が否定し難いものであったからである。それゆえ Kompromiss という用語はキリスト教をその歴史的支脈との関係で理解しようとする試みにおいて特徴的であらわれる。トレルチにおける Kompromiss の用法としては、キリスト教と歴史的状况との相互関係性を示す用法が第一義的であり、用例のかなりの部分がそうである。「世との Kompromiss」という表現はその最も典型的なものである。『社会教説』の結論部においてトレルチが提示するキリスト教的エトスの三類型は、キリスト教が「世」との Kompromiss の如何をめぐって分極化する歴史的ダイナミズムを三つの基本的類型に抽象したものである。従つて、トレルチが導出したキリスト教的エトスの三類型は、最も根底的には、Kompromiss にたいする三つの異なった存在形式として規定される。

以下、重複を厭わずトレルチ自身の言葉でこのことを明らかにしてみよう。

(一) 「教会」 (Kirche)

「とりわけ教会は、国民的かつ大衆的な制度組織として Kompromiss を余儀なくされる⁽⁴⁶⁾」。

「根底において、教会はもとよりいまだ Kompromiss であつた⁽⁴⁷⁾」。

「かくして教会は制度組織となるのであるが、かかる制度組

織はその客観的な恩寵の至宝によって信徒の群れを被覆し、彼らに世との Kompromiß を可能ならしめる」。

「かしこ [教会] とは、世ならびに罪との Kompromiß が、こゝ [分派] とは、最も鋭い世との対立と主観的聖徒の教団が」。

「教会は世との Kompromiß を求め、みずからの説く罪の赦しの理念ならびに恩寵の理念との Kompromiß を相当程度まで見出す」。

これ以外にも、教会を端的に「Kompromiß」とうったり、「教會的 Kompromiß」、「教会のかかる Kompromiß の性質」、「教会という Kompromiß の制度」という表現もみられ、「教会」が《Kompromiß》の立場にあることがわかる。

(1) 「分派」(Sekte)

「分派は主観的・個人的な真理と結合との原理であり、また Kompromiß なる [Kompromiß のなく] 福音的基準の原理である」。

「しかしかかる教會的 Kompromiß と並んで最初から分派が存在していたのであって、この分派は山上の説教の純粋な理想を Kompromiß なしに貫徹しようと欲し、よってもって世との鋭い対立へと追いやられた」。

「Kompromiß なる分派は文化に対するラディカルな敵意を主張する」。

「分派は世との Kompromiß を拒否し、またそれゆゑに相對

的自然法を拒否する」。

「分派類型の特質は厳格主義であり、かかる厳格主義によって Kompromiß なしに福音的倫理を、とりわけ山上の説教を貫徹することとをそれは要求する」。

「明白なことながら、この分派類型は本性的に国民—國家教會を侮蔑せざるをえないし、また制度組織の性格を自発的教団と置き換え、とりわけ世俗的社會の文化や教養との Kompromiß を、またそのキリスト教以下の生活基準を回避し拒絶する。分派類型は kompromißfeindlich [Kompromiß に敵對的] かつ文化に敵對的になるのであるが、それは教會類型が兩方向において友好的に對處するのと全く逆である」。

「グレゴリウスの時代以後、普遍的教會の形成と並んで出現する分派類型は、原始キリスト教的個人主義、宗教的内面性、Kompromiß なる道德を更新する」。

「この分派主義は、教會的普遍性およびそれと必然的に結びついた Kompromiß を断念し、可能な限り字義的に聖書に従いながら、自分たちのサークル内でキリスト教的道德性の完膚なき嚴格さを実現するのである」。

以上の引用からわかるように、「分派」とは、端的に言つて《Kompromißlosigkeit》ないし《ohne Kompromiß》の立場である。

(2) 「神秘主義」(Mystik)

「しかし……阿普、すなわち Kompromiß 及 Kompromißlosigkeit に無頓着 (unbekümmert) に、スピリチュアリズム・メッシーナ神秘主義は霊の自由と良心の自由のうちで生きる。これは良い意味でもまたときには悪い意味でも反律法主義的である」⁽⁶⁵⁾。

「それゆゑ神秘主義は、教会のように、相対的自然法との Kompromiß を必要としなければ、分派とともに絶対的自然法ないし絶対的啓示法の実現を希望するような必要もない」⁽⁶⁷⁾。

Kompromiß との関連において「神秘主義」ないし「スピリチュアリズム」について述べた用例はきわめて少ないのであるが、これは「神秘主義」の立場が Kompromiß を結ぶ・結ばないというところに基本的に無頓着だからである。それは教会的 Kompromiß に対してだけでなく、分派的なラディカルな Kompromißlosigkeit に対しても同様に無関心・無頓着である。ここに「神秘主義」が「分派」から区別される所以があるのであって、われわれはこの「神秘主義」を Kompromiß 及 Kompromißlosigkeit のいずれでも無頓着な立場、一言でいえば「Unbekümmertheit」ならし「Gleichgültigkeit」の立場とすることができるのである。

さて、キリスト教の歴史全体の広かつ深い研究を通して得られた以上のような洞察は、次のように総括される。

「それ『福音のエトス』は永続する地上の世界にあっては

Kompromiß ないしは貫徹されることができない理想である。それゆゑキリスト教的エトスの歴史は、かかる Kompromiß のつねに新たな探求となり、かつまたその Kompromiß の心情のつねに新たな克服となるのである」⁽⁶⁸⁾。

こうしたトレルチのキリスト教史理解は、彼のキリスト教理解に直截に接続する。

トレルチは、「キリスト教の本質とは何の謂いか」との問いに答えて、『宗教学派』の教義学の中で、「『キリスト教の』『本質』は、キリスト教という歴史の勢力がおのの全体状況に対応しながらそのつどなす、生産的な新解釈ならびに新たな順応としてのみ理解される」(傍点は筆者)と述べているが、かかる生産的 (produktiv) な「新解釈」(Neudeutung) と「新たな順応」(Neuanpassung) が、トレルチのこの Kompromiß であることは、『歴史主義とその克服』の最後のくだりででてくる「キリスト教は、これを全体として眺めるとき、神の国というエトピアと永続する現実生活との」(0) おおがかりなそのつど新たな仕方で作られた Kompromiß である」といふ言い方からも明らかである。

その歴史の過去から抽象していえば、キリスト教の本質はつねに新たな Kompromiß である。しかしてこの抽象概念 (Abstraktionsbegriff) とこの Kompromiß は、おのずから理想概念 (Idealbegriff) にならなければならない。「本質規定は本

質形成である⁽⁷¹⁾。本質を規定するということは、将来を照らし出すような仕方では、キリスト教の本質的理念を歴史から剔抉することであり、同時にまた現在と将来の世界をこの光の中で生き生きと概観することになければならない。それゆえ当然この Kompromiß は将来へと延長されなければならない。しかも過去にキリスト教が結んできた古き Kompromiß が、近代世界の成立以後悉く解消された感のある現代世界にあつて、伝統的歴史のキリスト教精神と近代—現代世界との間に新たなより包括的な Kompromiß を完成することは、実践的見地からしても緊急の課題である。トレルチが「新たな補充」(eine neue Ergänzung) の必要性を力説し、いかんにかそれが形成せられるかを問題にするのは、全く頷けることである。

『社会教説』以後のトレルチ、すなわち『社会教説』から『歴史主義とその諸問題』へと至る彼の歩みも、新たな Kompromiß の探求という方向線上で捉えて大過なくであろう⁽⁷²⁾。この著作集第三巻において焦眉の問題となる「文化総合」(Kultur-synthese) の課題は、新たな Kompromiß を完成するところの先の課題と決して無関係ではないからである。

五、むすび

以上、われわれはトレルチのおびる Kompromiß の概念を可能な限りトレルチに内在的に説明しようと努めてきたのであるが、これによつてもまだその全貌が顕たなつたわけではない。

この概念の地下水脈は深くトレルチの思想の核心にまで通ずるものである⁽⁷³⁾。これを説明するためにはトレルチの思想に深く分け入らなければならないが、紙数が尽きたのでここでその課題に取り組むことはできない。しかしこの地下水脈を掘り当てなければ、トレルチの Kompromiß 概念の真髓はわからないであろう⁽⁷⁴⁾。この意味でわれわれの研究はあくまでも暫定的なものにすぎない。しかしその一端は闡明できたと思ふ。

〈註〉

略記

- I Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen (Gesammelte Schriften, Bd. I), Tübingen 1912, Neudruck Aalen 1977.
- II Zur religiösen Lage, Religionsphilosophie und Ethik (Gesammelte Schriften, Bd. II), Tübingen 1913, Neudruck Aalen 1962.
- III Der Historismus und seine Probleme (Gesammelte Schriften, Bd. III), Tübingen 1922, Neudruck Aalen 1961.
- IV Aufsätze zur Geistesgeschichte und Religionssoziologie (Gesammelte Schriften, Bd. IV), hrsg. von H. Baron, Tübingen 1925, Neudruck Aalen 1966.

ト レ ル 子 ン お け る Kompromiß 概 念 一 覧 表

著 作 名	I	II	III	IV	SR	GM	WL	AC	HKR	Rph	PE	PC	BP	Sch	GJ	Au	Sph	HÜ	SB	DG	Br	
Kompromiß	2, 40, 45, 69 79, 90, 116 ³ , 131 156, 179, 225Ann. 227, 248, 250Ann. ³ 338, 351 ² , 359 ² 364Ann., 367Ann. 369, 370, 372 ² , 376 379, 391, 393, 401 ² 407, 436, 481, 505 ³ 507 ³ , 551, 574Ann. 688 ³ , 696, 795, 802 805, 811, 815, 821 821Ann., 847, 916 Ann., 919, 947, 973 ⁷ 974 ² , 980	52, 55, 74, 104 ⁴ 127, 128 ² , 175 ³ , 176 181 ² , 199, 224, 286 294Ann., 329, 330 331, 362, 410, 412 487, 556, 558, 562 606, 654, 655, 663 664, 665, 667Ann. 705, 772, 816, 839 ² 852, 854, 855, 859	525	12, 30, 106, 107 111, 127, 128 ² , 139 ² 160, 161, 164, 167 168, 170, 171, 172 176, 177 ² , 180, 184 186, 234, 306, 311 326, 346, 370, 371 372, 379, 394, 401 ² 419, 420, 469, 476 504 ³ , 528, 529 ² , 589 620, 726Ann., 738 ² 769, 780, 794, 796 802 ³ , 809, 819 ² , 825 ² 848	V 366 V 109 ² 204	52		150	40, 41 ³ 42, 45 Ann., 47 59 ² , 60 Ann. ² , 77 133	436 ²	15 ²	446 ² , 477 494, 502 505, 506 520, 528 553, 559 587, 588 599 ² , 601 605, 610 616 ² , 617 624, 640 642 ³ , 686 699, 705 708, 737	11 ² 39 67	12 14	133	III	9 13 17 18 19 22 28	19 ⁴ 21 43 ² 47 97 ³ 101 102 103 104 ⁵ 105 ²	2 41 43 164 209 246	7 117 163 164	94	
Compromiss							15 ³ , 23 25, 26 ² 28, 40 ² 44, 45 46, 47				38											
形		201																				
形容																						
詞		14, 104										454						56				
動詞																						
																						18

※著作名はすべて略号で表わした。これについては註の<略記>の項を参照のこと。

※※表中の大きな方の数字は、筆者が参照したテキストの頁数を示す。頁数を示す数字の右肩にある小さい方の数字は同一頁にあらわれる頻度を示す。

※※※Richard Rothe, Tübingen 1899; Psychologie und Erkenntnistheorie in der Religionswissenschaft, Tübingen 1905; Glaubenslehre, hrsg. von G. v. Le Fort, München-Leipzig 1925 は参照したが、筆者の読んだ限りでは、これらの著作において Kompromiß の概念は一度も使用されていないので、これらの著作は省略した。

- AC Die Absolutheit des Christentums und die Religionsgeschichte, Tübingen 11902, 21912.
- Au Augustin, die christliche Antike und das Mittelalter, München u. Leipzig 1915, Neudruck Aalen 1963.
- BP Die Bedeutung des Protestantismus für die Entstehung der modernen Welt, München u. Berlin 1906, München 1911, Neudruck Aalen 1963
- Br Briefe an Friedrich von Hügel 1901-1923, eingel. u. hrsg. von K.-E. Apfelbacher -P. Neuner, Paderborn 1974.
- DG Deutscher Geist und Westeuropa, hrsg. von H. Baron, Tübingen 1925, Neudruck Aalen 1966.
- GJ Die Bedeutung der Geschichtlichkeit Jesu für den Glauben, Tübingen 1911, später in: Die Absolutheit des Christentums (Siebenstern-Taschenbücher 138), München u. Hamburg 1969, S. 132-162.
- GM Geschichte und Metaphysik, in: ZThK VIII (1898) S.1-69.
- HKR Das Historische in Kants Religionsphilosophie, in: Kantstudien IX (1904) S.21-154, Sonderabdruck Berlin 1904.
- HÜ Der Historismus und seine Überbindung, eingel. u. hrsg. von F. v. Hügel, Berlin 1924.
- PC Protestantisches Christentum und Kirche in der Neuzeit, in: P. Hinneberg (Hrsg.), Die Kultur der Gegenwart, I Abt. IV, 1, Berlin-Leipzig 11906, 21909, S. 431-755.
- PE Politische Ethik und Christentum, Göttingen 1904.
- Rph Religionsphilosophie, in: W. Windelband (Hrsg.), Die Philosophie im Beginn des zwanzigsten Jahrhunderts (Festschrift für Kuno Fischer), Heidelberg 1907, S. 423-486.
- SB Spektator-Briefe, hrsg. von H. Baron, Tübingen 1924, Neudruck Aalen 1966.
- Sch Schleiermacher und die Kirche, in: F. Naumann (Hrsg.), Schleiermacher, der Philosoph des Glaubens, Berlin 1910, S. 9-35.
- Sph Die Sozialphilosophie des Christentums, Zürich 1922.
- SR Die Selbständigkeit der Religion, in: ZThK V (1895) S. 361-436; VI (1896) S. 71-110; 167-218.
- WL Die wissenschaftliche Lage und ihre Anforderungen an die Theologie, Tübingen-Freiburg-Leipzig 1900.
- (一) 宗教の歴史 (二) 宗教の社会 (三) 宗教の倫理 (四) 宗教の文化

キリスト教の勞作と評價」(1973)を。vgl. Roland H. Bainton, Ernst Troeltsch—Thirty Years Later, in: Theology Today 8 (Princeton, N. J., 1951) pp. 70-96.

(2) M. A. Troeltsch, *Handbuch der Kirchengeschichte*, Tübingen 1907-1909, 191971) のなかで Troeltsch の歴史理解が反映されている以外、Troeltsch の神学與論 Troeltsch は古来法られてこなかったと述べている。vgl. Karl-Ernst Apfelbacher, *Frömmigkeit und Wissenschaft*. Ernst Troeltsch und sein theologisches Programm, München-Paderborn-Wien 1978, S. 31.

(3) Troeltsch 自身が『社会教説』の序言で『社会教説』に結集されている研究はキリスト教の歴史全体に社会学的方法が適用されたとき容易に統一の絆を獲得した、と述べているように、彼の採った方法論とは社会学的方法論である。Troeltsch はのちに自分の『社会教説』に言及して、「この書は、ハルナックが上梓した、キリスト教についての本質的イデオロギー的・教義的な偉大な叙述に、本質的に社会学的・現実主義的・倫理的な叙述を比肩させるものである」(『S. 369, Anm. 190)と言っているが、ここから本質的にイデオロギー的な叙述とは、「信仰思想の發展だけに関心を抱くような叙述」のことであり、社会学的叙述とは、「キリスト教

の」倫理思想ならびに宗教思想をそのキリスト教共同体形成との密接な連関や世俗的な社会的勢力との交互作用で捉える描き方」(II, S. 449)を意味する。

(4) E. Troeltsch, *Christian Thought: Its History and Application*, ed. and with an introduction and index by Baron F. von Hügel, *A Living Age Book*, 1957, p. 172. Troeltsch の『Der Historismus und seine Überbindung, 1924.』の英訳である。引用した箇所は「宗教・愛国心・宗教」の論議の末尾の二節であるが、そのうち理由ひかえり論議は省略されている。

(5) E. Troeltsch, *Vernunft und Offenbarung bei Johann Gerhard und Melancthon: Untersuchung zur Geschichte der altprotestantischen Theologie*, Göttingen 1891, S. 213. 尚、筆者が Troeltsch の Benjamin A. Reist, *Toward a Theology of Involvement: The Thought of Ernst Troeltsch*, London 1966 を通じて知ったが、生簡 Troeltsch のこの学位論文を参照する機会に恵まれなかったため、ここにあおられる Kompromiss 概念は以下の考察の対象に入っていない。

(6) もとよりかかる分類は飽くまでも便宜的にすぎないものであり、他にもいろいろな分類の仕方が可能である。従って以下の分類はかなり恣意的なものであるが、筆者の意図は分類すること自体にあるのではなく、Troeltsch の用法の多様性

ル大ナル非難ヲ撰録スルニシテ也

- (ノ) 〔ㄨ〕 I, S. 156, 372, 379, 407, 815, 916Ann.; II, S. 558; W, S. 106, 164; WL, S. 26; PC, S. 446, 506; Sph, S. 17, 18 〔ㄨ〕 I, S. 40, 45, 69, 359, 507; W, S. 170, 172; PC, S. 686; BP, S. 11 〔ㄨ〕 I, S. 821, 821Ann.; Sph, S. 17, 19, 〔ㄨ〕 W, S. 30, 170, 177, 180, 819; PC, S. 642. 〔ㄨ〕 I, S. 90; W, S. 161, 589; PE, S. 15; PC, S. 505; DG, S. 163; vgl. II, S. 175; W, S. 127. 〔ㄨ〕 W, S. 172; Au, S. Ⅱ
- (ヨ) 〔ㄨ〕 I, S. 481, 795; W, S. 234, 419; WL, S. 40. 〔ㄨ〕 II, S. 556; W, S. 476, 802, 848; WL, S. 40. 〔ㄨ〕 W, S. 401, 769; WL, S. 23, 40. 〔ㄨ〕 II, S. 854; W, S. 139; PC, S. 599; BP, S. 39. 〔ㄨ〕 WL, S. 15; GJ, S. 133.
- (コ) 〔ㄨ〕 II, S. 329; W, S. 326, 529; PC, S. 599, 617, 640, 708. 〔ㄨ〕 W, S. 371, 420, 620, vgl. II, S. 839; W, S. 370, 372, 809; PC, S. 699. 〔ㄨ〕 II, S. 330, 331. 〔ㄨ〕 II, S. 362; SR, W-S. 109. 〔ㄨ〕 W, S. 311; SR, V-S. 366; PC, S. 610, 705.
- (ク) 〔ㄨ〕 I, S. 370, 974, 980; II, S. 104, 294Ann. 〔ㄨ〕 I, S. 359, 364 Ann., 847, 973; W, S. 528, 529. 〔ㄨ〕 I, S. 379, 424, 910, 945, 973, 974; II, S. 104; W, S. 164, 171, 172; PC, S. 454, 616.
- (キ) 〔ㄨ〕 PC, S. 780. 〔ㄨ〕 W, S. 128, 186; PC, S. 599. 〔ㄨ〕 I, S. 391, 393, 821Ann. 〔ㄨ〕 I, S. 805. 〔ㄨ〕 W, S. 184.

vgl. W, S. 128.

- (ク) 〔ㄨ〕 HÜ, S. 19. 〔ㄨ〕 HÜ, S. 104. 〔ㄨ〕 W, S. 176; HKR, S. 40. 〔ㄨ〕 II, S. 772. 〔ㄨ〕 II, S. 410. 〔ㄨ〕 II, S. 606.
- (ケ) 〔ㄨ〕 HKR, S. 77. 〔ㄨ〕 I, S. 436. 〔ㄨ〕 Rph, S. 436. 〔ㄨ〕 I, S. 551. 〔ㄨ〕 BP, S. 67. 〔ㄨ〕 W, S. 306. 〔ㄨ〕 SB, S. 164. 〔ㄨ〕 SB, S. 209.
- (コ) 〔ㄨ〕 I, S. 481. 〔ㄨ〕 PC, S. 528. 〔ㄨ〕 II, S. 665; HKR, S. 47, 133; Rph, S. 436; HÜ, S. 43. 〔ㄨ〕 I, S. 116. 〔ㄨ〕 I, S. 401. 〔ㄨ〕 I, S. 973. 〔ㄨ〕 II, S. 294 Ann. 〔ㄨ〕 W, S. 184. 〔ㄨ〕 I, S. 847. 〔ㄨ〕 II, S. 104; HÜ, S. 105 〔ㄨ〕 HKR, S. 60Ann. 〔ㄨ〕 PC, S. 699. 〔ㄨ〕 W, S. 504.
- (ク) 米屋の「讀解」參照のルニ
- (ケ) ルニシテ撰録セラルル例の大部分がルニ採録スル
- (コ) HÜ, S. 104.
- (ク) II, S. 224.
- (ケ) II, S. 74. vgl. II, S. 224.
- (コ) SR, in: ZThK Ⅱ (1896), S. 204.
- (ク) II, S. 487.
- (コ) I, S. 227, 250Ann.
- (ク) W, S. 738.

- (24) HÜ, S. 43.
 (25) vgl. I, S. 169; W, S. 128
 (26) I, S. 606; W, S. 809.
 (27) W, S. 809; Sph, S. 28.
 (28) II, S. 199.
 (29) W, S. 30; HKR, S. 40.
 (30) W, S. 738; HÜ, S. 19.
 (31) HKR, S. 40, 42, 59.
 (32) HKR, S. 60Anm.
 (33) I, S. 333; I, S. 330.
 (34) II, S. 663.
 (35) Sph, S. 9; SB, S. 41, vgl. I, S. 169.
 (36) I, S. 169.
 (37) James L. Adams, Ernst Troeltsch as Analyst of Religion, in: Journal for the Scientific Study of Religion I (1961), p. 105.
 (38) II, S. 815f.
 (39) vgl. II, S. 176, 181.
 (40) I, S. 333.
 (41) I, S. 986.
 (42) vgl. II, S. 104.
 (43) vgl. I, S. 507; PC, S. 616.

- (44) I, S. 372.
 (45) vgl. I, S. 370; W, S. 738.
 (46) HÜ, S. 47. ヲルツェルチは「かかる創造的な Kompromiß の思想によつて、倫理的・形而上学的な個性の思想 (Individualitätsgedanke) を主張してゐる。トルチチにおける Kompromiß の概念と個性概念との結びつきはきわめて重要なものである。」
 (47) vgl. Benjamin A. Reist, Op. cit., p. 157. しかしそれだけではない。そこにはトルチ自身の間接性も関係しているかも知れない。マリアンネ・ウーバーは夫マックス・ウーバーとトルチを比較して、「トルチのほうは、神学の枠のなかで精神の自由と寛容のために闘わなければならぬとすらだけで充分だった——その他の点では彼は闘士ではなく、宥和と調停、人間の弱点との妥協という態度を取っていた」(Marianne Weber, Max Weber. Ein Lebensbild, Tübingen 1926, S. 240f. 邦訳『マックス・ウーバー』(大久保和郎訳、みすず書房、昭和五三年)第一卷一八二頁から引用)と述べてゐる。しかしながら「ききにわれわれが見てきたような Kompromiß の積極的創造の意味は、キリスト教史の研究のなから字び取られたと考へるほうが順当であらう。」
 (48) I, S. 973.

- (49) II, S. 104.
- (50) W, S. 106f.
- (51) Sph., S. 17.
- (52) Sph., S. 18.
- (53) I, S. 974.
- (54) 註(9) [4]参照。
- (55) II, S. 104.
- (56) II, S. 294 Anm.
- (57) I, S. 424.
- (58) I, S. 973f.
- (59) II, S. 104.
- (60) I, S. 379.
- (61) W, S. 171.
- (62) W, S. 172.
- (63) PC, S. 454.
- (64) PC, S. 616.
- (65) I, S. 974.
- (66) Loc. cit.
- (67) W, S. 186.
- (68) I, S. 973.
- (69) II, S. 511.
- (70) HÜ, S. 104.

- (71) II, S. 431. しいでながらここで触れておけば、『キリスト教の本質』とは何の謂いか」という論文と『社会教説』の関連づけは、トネルチのキリスト教理解をみる上で決定的に重要である。この関連づけを欠けば、『社会教説』は、カルロ・フントニが酷評するような「過去のキリスト教の社会思想がもはや現在の社会問題にあてはまらない」ということを確認しただけのものになつてしまつてゐる。vgl. Carlo Antoni, *Dallo storicismo alla sociologia*, Firenze 1940: dt, Vom Historismus zur Soziologie, Stuttgart 1952, S. 101.
- (72) トネルチによれば、キリスト教が過去に抱へた Kompromißのうちで最も重要なものはたゞあり、ひとつは超自然的啓示と古代哲学的ロリス論との Kompromiß であり——かくして成立したのが三一論とキリスト論である——、ちよつとは聖書のキリスト教的道徳律とストア的自然法の教説との Kompromiß である。vgl. WT, S. 22ff.
- (73) I, S. 975. 上の「新たな補充」を形成する課題が新たな Kompromiß を探求する課題であることは、ライントの指摘をめぐらしてある。vgl. Benjamin A. Reiser, *Op. cit.*, p. 165.
- (74) ライントの『参与の神学の試み』は、基本的なこの方向でトネルチを解釈した包括的な研究書である。この書の中で彼は、「むしろ『歴史主義とその諸問題』は、新たな Kompromiß が鍛造されなければならない状況を明澄化しよう」と

「その種々のことばを採りださずにはなぬこと」(Benjamin A. Reist, *Op. cit.*, p. 166) といつてゐる。この種々の種々の同義語である。

(75) この種々の種々の早期に最も鋭く見抜くことゝするの故、H・R・リーゼンである。彼はエーレンタの宗義批評や「Kompromißの批評」を撰出しようとする。vgl. Helmut R. Niebuhr, Ernst Troeltsch's Philosophy of Religion, unpublished Ph.D. dissertation, Yale University 1924, reissued by University Microfilms, Inc., Ann Arbor, Michigan 1965, esp., p. 5, 270.

(76) J・R・ハンソンの研究は、この意味で全く不十分であるのである。ライステルマンタスの研究を翻寫したたゞのエーレンタのKompromiß概念の思想的深さを今この種々のことばを。vgl. John R. Hanson, Ernst Troeltsch's Concept of Compromise, in: *The Lutheran Quarterly*, XVIII (1966), pp. 351-361.